
「三人目の魔法使い」

某県民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「三人目の魔法使い」

【Nコード】

N1916Z

【作者名】

某県民

【あらすじ】

自らの想像を外界に反映させる術、魔術。魔術が人を判断する指標となるまでに浸透し、それに依存しきった世界でいきる少年、廓義宣人が魔術高校に入学したときから魔術の上位存在、魔法をめぐる争いが加速する。

「三人目の魔法使い」のリメイク、もといリベンジです。

感想、評価点、お気に入りをいただけるととてもありがたいです。

プロローグ 魔法使い

三人目の魔法使い プロローグ 魔法使い

「魔法。」

そんな言葉が現実味を帯びてきたのはいつだっただろうか。

史記によればそれは1世紀ほど前とされている。

当時、地球を滅ぼすといわれた隕石が存在した。

大国が集い何発もの原子爆弾を映画よろしく打ち込んだが、それでも軌道をまったくと言っていいほど変えなかった超巨大隕石。人々は本当にまじめな顔をして地球脱出に備え眠れぬ日々を過ごしていた。

その確定的な滅びを地球からそらした。いや。

その滅びをこの世界、宇宙から消してしまった英雄が存在した。

それが最初の魔法使い。

くるわすため
名前は廓図定。

最初に彼はとある紛争地に突如として現れ、人々の傷をいやした。現れた時に彼が口にした言葉がある。

「この世界を救う。」

そして彼は自分の特異性の証明のために多数の予言を残した。

それは危険人物の死期や宝くじの当選番号など、

大小さまざまなジャンルに分かれてなされた。

この何とも現実味がない予言の数々に彼をただのめだちたがりだと

評価し批判する人が当時には多数存在したそうだと。

しかし彼の予言は正しかった。

世界で起きる事件。隕石の軌道。

そのすべてが彼の予言のままに動いて行った。

さらに彼には特異な点があった。彼は戸籍を持っていなかったのだ。彼が現れようと行動を起こした時以外は一切コンタクトをとれなかった。

国を挙げて調査しても返ってくるのは廓図の存在を否定する結果ばかり。

このような様々な不可思議な事項が並びに並び、世界は彼にくぎ付けになった。

人々は言った。彼は魔法使いだと。預言者だと。

一部の人は神としてあがめることさえした。

そして世界中の多くの人々が彼にあこがれた。

しかしある日、彼は言ったそうだと。

「決して私は神ではない。ただのしがない人間だ。

ただ君たちより少し深い世界を観測しているだけだ。

君たちにもいつか見える時が来るだろう。」と。

その言葉の真意はいまだに解明されていない。

そしてこの言葉を残した日、隕石は何の痕跡もなく消滅していた。当時の隕石の動きをたどっていたリーダー管制官によると

巨大隕石は何の前触れもなしにリーダーから消滅したそうだと。

そしてそれと時を同じくして、隕石と共に廓図定もその消息を絶った。

多くの人間が彼を探した。

しかし世界のどこを探しても彼のいた痕跡は存在しなかった。当時はこれこそ世界の終りだと恐慌に陥る人々もいたそうだった。

そこまでに廓図は世界に認識されていた。

しかしそんな恐慌もつかの間である。

彼の存在は人々の意識からも本来ありえないほどのスピードで消滅していった。まるで仕組まれているかのように。

データを消去するかのようだった。

昨日まで世界が終ると信じ込み、小康状態になっていた人間も次の日には以前のように過ごすようになった。

誰もが彼の行った神業ともいえる所業に興味を持たなくなった。

痕跡の搜索に興味を示す人間も減っていった。

世界に彼という存在がもとより存在していなかったかのように改変されていった。それはまるで魔法のようだった。と当時の人間は語っていたそうだった。

ならばなぜこの情報が残っているのか。

それは当時唯一記憶の浸食を受けなかった

7人の人間が記録したからである。

彼らは記憶を維持しているほかにも共通点がある。

それは彼の搜索を試みた人間であること。そして出向いた先で謎の光を観測したこと。

その光の正体と効能は現代の魔術でも大きな到達地点とされている。

そして彼らは覚醒する。

廓図定の技を継ぐ人間として。

しかし彼等の揮^{ふる}える術は「魔法」などという人々が望み、憧れた救いの力ではなかった。

その力は七人を通して人を殺害、もしくは淘汰していく力だった。

7人はそれぞれの見地から「人」のためになる行動をとった。

一人は敵国を打ち滅ぼし、一人は一人の女ために国を滅ぼした。彼らは他人のためといいながら自分のために「魔術」を行使し続けた。

ただ一人の女性を除いては。

その女性は偶然か必然か廓図の名を持っていた。

名を廓^{つなき}図津奈木。

歴史上の二人目の魔法使いである。

彼女は魔術の利己的な行使によって腐敗した世界を平定した。

彼女以外の6人の魔術師を殺害することだ。

そして殺害した魔術師の力を模倣し自分のものにした。

それが彼女の扱える唯一の魔術。それは「投影魔術」であった。

詳しい理論などは一切確認されていないが、別の文献によると彼女は見たものを理解し、完全に複写できたそう

だ。彼女はそれを6人にわたって行いすべてを自らに投影した。

彼女はその先に見えたそうだ。

物事のすべての源。存在理由を。魔術の上位。魔法の存在を。すべての廓義定の技を。業を。

彼女は自らを「魔法使い」と呼称した。

「魔法使い」そう自称する彼女の顔は常に自嘲的な微笑に包まれていたという。世界は二人目の魔法使いの存在に大いに沸いた。

そんな中、彼女は人々に「魔術」を平等に説き普及した。ゆっくりと。着実に。魔術を通した人間の育成。一種の宗教的な意味合いを込めて人間を導こうとした。前と同じことは繰り返さないように。

しかし繰り返す、悲劇。リンネ。

彼女は殺害されてしまう。

彼女の弟子たちである魔術師たちに。彼らが動いた理由は簡単だ。彼女は自分たちを脅かす可能性を持つ上位の存在である唯一の存在「魔法使い」だったからである。

弟子たちが仲間を引き連れて津奈木を殺害しようと現れた時、彼女は用意していたかのように言葉を紡いだ。

「殺しなさい。それが私という歯車の存在意義なのだから。世界の加速を彼は望んでいるわ。」

そこからは連鎖的だった。各国家、勢力はすさまじい勢いで魔術を研究、発展させた。

他を出し抜き、圧倒し、支配したい。人類発生当初から受け継がれる黒き願望に導かれ人びとは争いを始めた。それが今日も続く戦争の発端である。

人間は争いのたびに技術を発展させる。皮肉にも彼女の死が今の技術力の根底をささえ、

人間に繁栄をもたらしている魔術の始まりだった。

たしかに魔術は多くの利益を生み出したが多くの犠牲も生み出している。

世界では今この一瞬でも何千という人々が魔術によって未来を刈り取られているかもしれない。

そしてその争いは今日もその火を小さくはしたものの燃え続け、世界をむしばんでいる。

三人目の魔法使いの到来を期待したいくらいに現実腐っている。

また同じことを繰り返すかもしれない。争い続けるかもしれない。

それでも願ってしまうほどに世界は無変で、無情で残酷だ。

けれども多くの魔術師たちはいまでも個人のためにその大きすぎる力を振るいつづけている。

魔術は人々に浸透し、人々は魔術に依存した。しかしそんな世の中でも守らなければならないものは確かに存在する。

それを守るためならば俺は喜んでこの力をふるおう。いつだったか、俺はそう決意した。

1 - 1 あわただしい早朝

まどろみ。心地の良い空間。

誰も好き好んでここから出たいとは思わないだろう。

しかし人間とは稀有なもので自ら設置した機械によってこの空間を破壊するのだ。

まったくもって意味不明で俺にはかけらも理解できない。

もちろんそんな愚かなことをしない俺は完全なる空間でこのまま微まじ睡るみを堪能……

「ぴこぴこぴこぴこ」

何かの音が遠くから聞こえる。

セミか？今の季節は春。しかもつい最近春一番が吹いたほどの春はじめである。さすがにフライングが過ぎる。

こんな時期に求愛しても誰もいないぞ。いや。

そもそもここまで電子音のようには鳴かないか。

ピコピコゼミなんて言うのは俺の知識の中には存在しない。

いたらホラーだ。ということは……

「だれだ！目覚まし時計つけたやつ！」

怒号一発。朝から元気がいい少年が一人。というか俺だった。

「はあい。おねえちゃんです！実は今日の入学式が楽しみでたまらなかつた宣人せんとへのお祝いを込めて設置しましたっ。今日もかわいい寝癖だねっ。うーんかわいい」

といって俺の顔を自分の胸に抱え込むようにしてハグする女性が一

人。長い黒髪と藍色の目が特徴的で長身。
その姿は黒い漆に塗り彩られた艶やかな牡丹の飾り物のようだった。
というか姉さんだった。

「何とも目覚めの良い朝だねえ姉さん^{ねえ}。あと俺はそんな運動会前日の小学二年生みたいな心境にはなってないからな」

対して言い返す俺は自分のことをかわいいなどとはかけらも思っていない。確かに線は細いほうであると思うが…。

そういつて鏡を見ると髪は漆のような黒で短髪。

寝癖がかかったそれと、大きな瞳は確かに若干の幼さなさを感じさせた。わからなくもない……のか？

「うん。いつも通り宣人がかわいくてね」

俺の精いっぱいの皮肉を込めたひと言と葛藤は姉さんの語尾にハートでも付くのではないかという勢いに一蹴される。

そして姉さんはさらに胸を押し付けるように俺を抱きしめていく。

「うばがあ。姉さん。いきで……きない」

俺は人語とは思えないうめき声をあげ、みるみる生気を失っていく。
いまごろ顔色はもはや土色といっても過言ではない色に変化しているだろう。

「あら。姉さんの豊満なバストに感激して息もできないの？宣人君やらしい」。

けどね。そういうのもありだと思っの」

「いや姉さんそこまで胸大き、ぐぼあ」

何とも子気味の良い音を立ててみぞおちに突き刺さる正拳突き。抱き合った（？）状況からの正拳突きにもかかわらず、かなりの威力だった。

俺はベッドの上をのた打ち回り悶絶する。

「はい。宣人は事実無根を語ってないでご飯作ってね。仕事に送れちゃうわ」

さきほどみぞおちにこぶしを打ち込んだ人間の言いようでは少なくともない。

「じゃあ自分でつくれ…。何でもないです」

ぎろりと睨まれると俺は渋々であるがみぞおちを抑えながらベッドから這い出る。

「まったく。姉さんも感謝してくれよ。いまどきここまでよくできた弟はいないぞ」

「うんうん。してる。してる」

俺はさらにがつくりとうなだれ、姉さんは満面の笑みでそれを見つめていた。

朝のキッチンは俺にとっては一つのスイッチだ。一日の始まりという明確な区分を俺に与えてくれる。

「今日は時間もなかったからトーストにサラダ。それにオムレツでいいな」

いいながら俺は卵を割ってかき混ぜる。

オムレツの火の通り具合は俺と姉さんで好みが違うので別々に。

俺はまだトロツとした感じが好きだが姉さんはしっかり焼き派だ。

ドレッシングは出来合いのものだがそこは勘弁してほしい。

朝はやはり時間がないのだ。

姉さんが口を開く。

「けどさ。宣人ってなんだかんだいってしっかりやってくれるのよねえ。

いつもは嫌だとしかいわないのに。ツンデレ？かわいい」

「ツンデレは男がやってもかわいくない。あとご飯はつくるならしっかりやらないと。食材がもつたいないからな」

俺の声を聴くと姉さんはしばらく思案し、

「べ、別に宣人のために食べてあげてるわけじゃないんだからねっ」

「……………」

そのあとは無言であった。

その状況に耐えかねたのか姉さんがわざとらしく咳払いをした。

「いっほん」

その顔は気持ち赤くなっていた。

「そういうことじゃなくてね。」

私は別にトーストだけでもいいのに毎回結構立派じゃない。朝ごはん」

リビングからキッチンにいる俺を覗き込む姉さん。

それに見向きもせず、調理途中のオムレツを見つめながら答える。

「じゃあ毎朝トースト焼いて食って仕事行ってください」

「あはは。宣人君厳しい。おねーさんのガラスの心に傷がついちやう」

「あなたはガラスでも防弾ガラスでしょ。厚さ7cmくらいの」

「さすがに厚すぎじゃないかしら？」

「突っ込みどころはそこですか……」

俺は落胆した。きっと顔には影が落ちている。

今朝の怒号の持ち主とは到底思えない自らの衰弱ぶりに驚くばかりだ。

そんなやり取りをしている間に朝食は完成した。

どれもおいしそうな色合いを放っており、

特にオムレツは我ながら要望通りの絶妙な火加減だった。

「おいしい。やっぱり宣人のオムレツは美味しいわ。」

なんでこういう細かいことは得意なのに魔術のほうはからっきしなのかしら……」

眉根にしわを寄せて久方ぶりの真剣な表情を見せる。

「仕方ないな、あれは。」

人には向き不向き……ってか姉さんもそこらへんは何となく知ってるだろ？俺の都合というか境遇というか」

むしろ魔術を使えない人間が普通だ、と付け加えかけたがそれは言わないことにした。俺たちはこの身に他人とは違う才を宿したことを自覚しなければならぬ。

「何となくしか聞かされてないのよね。けどいいじゃない。「大した魔術を使えない大層な「魔術師」頼りになってるわよ。いつも。ほらこないだの事件のときとか。あの時はすごかったわよね。自殺未遂の女の子たすけたやつ」

そんなこともあったかもしれない。正直なところ、姉さん絡みのやつかいごとが後をたたず、心当たりが多すぎるのだ。

トーストをかじる。近くのパン屋はなかなかに質がいい。

「あれは完全にまぐれ。たまたまそこに陣の基礎が敷いてあったからだよ。」

だいたい俺が俺の魔力だけ使って風の魔術で地上から5階までひとつとびつて無理な話だろ？

俺はそういう系列の魔術が苦手なことぐらい姉さんもしってるはずだ。きつとあの娘がいざという時のために敷いておいたやつだろうさ」

飛び降りようとしている少女を止めるために地上から屋上までひとつ飛び……我ながらよくやるわ。

そしてそれは朝からする話題ではないだろう……。

「うーん。確かにそうなんだけど…。だとしてもそれはそれですごく
いっていうか……。
だって他人の敷いた陣術を利用するってことは、その構成を理解し
て……」

何やら考え込んでしまった姉さんをしり目に俺は席を立った。

「はい。この話はおしまい。仕事遅れちゃうぞー」

そういつて俺は四角い黒いフレームのメガネをかける。
寝癖が少し気になるが少し整えるぐらいで済ました。

「え！あッやつば。遅れちゃう。お化粧しないと！」

「あ。姉さん今日から初仕事だっけ？がんばってね」

ジト目でいう俺。できるだけ棒読みを心がけよう。

「うんお姉ちゃん頑張る。じゃなくて急がないと！」

急に慌てふためく姉さん。素颜でもかなりの美人であるが
やはり女性として化粧は外せないところなのだろう。

女性というのはわからない。俺はあわて駆け回る姉さんを視界の隅
にとどめながら部屋を出ていった。

「まってよー。私職場行き方知らないー。電車乗れないー」

大人としてはかなり問題なんじゃないかという絶叫が住宅街に響き
渡る。

扉の外でそれを聞き届けた俺は歩き出す。

口元にはわずかに笑みが浮かんでいた。

俺はそれに気が付いていたがそれを隠すことはしなかった。

そして今日も俺は日常を歩く。

俺の家は通う学校まで10分と掛からないという好立地で歩く距離などたかが知れている。

しかしこのご時世、歩いている人間はほとんど存在しない。歩いているように見える人間は少数の魔術師で、魔術を使って「滑っている」だけだし、

多くの一般人は魔術師によって魔術的な処置が施され性能が大幅に向上した交通機関を利用している。空高くを車がレールなしに走っている。

夜を照らす光にも魔術的な技術が施されている。どんなものにも魔術が絡んでいる。

一般人は魔術的な利益を魔術師たちから提供されているわけだがどう考えてもそれを提供する魔術師より社会的に劣ってしまう。

そんな状況がまったく違和感なく溶け込んでしまっている。

そして俺はそんな中で当たり前のようにして過ごしている。

しかしそれについてとやかく言う権利は俺にはないのだ。

俺も魔術を行使して生きている側の人間だ。恵まれた人種だ。

この状況を肯定している側の人間だ。

そして魔術がなければ存命すらしていないだろう。

しかしその中でも多くの人に俺は自分のできる精いっぱいのことをしている。

かつて俺に魔術を仕込んだ師もそういつていた。

「己のために力を使え。だがその意味、取り違えるなよ」と。

俺は何のために魔術を深く学んでいるのだろう。

自分のためか、いや違っただろう。自分の守りたいもののため。
そのように師は言っていたはずだ。いつしか決意した言葉を思い出
し、一歩踏み出す。

「魔術……か」

俺は魔術交通機関に覆われ、
もとの色をほとんど見せなくなってしまった空を少しの間仰ぎ見て、
そして歩き出した。

1 - 1 あわただしい早朝（後書き）

リメイクとなります。ところどころに手を入れています。更新の
ブックが大きく空いてしまい申し訳ございませんでした。

1 - 2 早朝の出会い

高校生である俺が通う学校は国立の高校だ。

名前を魔法域到達方法研究所。

生徒の間では「ほう」という発音が3つ並ぶことから

「法3」とよばれている。

学校の名前から高校としての体を成していないことは明らかだろ
う。

ここは失われた術、魔法の再構築を目指す高等学校だ。

「魔法」

それは過去の英雄、廓図定が唯一扱えた術だといわれている。魔法、魔法。その明確な区分は存在せず、それを考察する魔術師の見解によつて大きく異なってくる。数多の魔術師が数多の咆哮からアプローチを続けているがいまだに魔法域にたどり着いた人間は存在しない。

その地点への到達が可能な魔術師を育て上げるのがこの研究所の存在意義だ。

……とはなっているがこの学校の実態は魔術師長の育成所だ。魔術師長とは今日も続いている世界を覆う戦争に投入される魔術師を総べる役職、いわば魔術師軍隊の指揮官だ。そのもとで戦いに臨むものが戦闘魔術師と呼ばれる一般兵である。

魔術を用いて敵を殲滅し、敵国の魔術師を打倒する職業で彼らはこの国の力そのものといってもいい。

その中の指揮官となれば相当な箔が付く。そもそも魔術師においてこの職は利権、地位を除いて考えても名誉というものが残る。

それを家のために求め、研鑽をつむのだ。彼らはこの国の力の象徴であり、ヒーローなのである。

しかし求められる力量はとても高いものでそう簡単に手に入るポス

トではなくその人数自体もとても少ない。

この国の魔術師長はすべてで8人、そのすべてが人外魔境の存在だ。これを目指して数々の生徒が研鑽をつむ。この学校では多くの生徒が魔術師としての戦闘技術を学ぶことになる。

魔術師長を目指す魔術師はこの学校に狂信的なまでなこだわりを持つそうだ。

彼らにとってこの学校に入学することが一つの関門のようなものらしい。

そしてその付加価値を目指して多くの魔術師がこの学校への入学を目指す。

当然試験の難度は相当のものになり、この国随一と言っても過言ではないものになる。

数々の志望生をふるいにかけるこの学校の入学試験には実技試験が用いられる。

実際に術を行使し、その威力、展開速度、種類……数多の判断要素を検証し、より「殺せる」魔術師を学校側は引き抜くことになる。

そして実技試験が苦手な俺はちよつとした裏ワザを使ってこの学園に入学した。

だが厳密に言えば俺が自ら裏ワザを行使したわけではなく言い訳がましいが学園が勧めてきた、というのが正しい。

この高校では実技試験の上位の人間。

つまり多くの人間を魔術で死に至らしめられる見込みのある生徒は「エリート」とよばれ、手厚い保護を受ける。

そしてエリート生徒の胸には学校が発行した特別バッジが輝いている。これは彼らにとってそれは自身の誇り、

他の生徒にとっては憧れ、そしておその象徴でもある。

そしてそれに対を成す存在が「ワースト」。

実技試験の結果が芳しくなかったものに与えられる差別的な身分だ。しかしこれは公に定められているものではなく、一部のエリートが生み出した俗語である。しかしワーストに対する偏見は激しいと聞く。要するにワーストは他生徒のストレスのはけ口として用意されているのだ。

そしてこの俺、廓義宣人は魔法の大成や魔術師長なんて言うことには何の興味もないしがない高校生魔術師だ。将来は魔術エンジニアあたりになろうと思っている。

魔術師長や魔法の研究家などもってのほかだ。魔術エンジニアとは魔術的な付加効果を付けた製品をつくる仕事のことだ。

それは車であつたり、テレビであつたりと多岐にわたる。これらの製品は一般人も扱えるもので、多くの家庭に普及している。定期的に魔術師によるメンテナンスが必要とはいえ、その利便性にひかれる一般人は多い。

この職業ならより多くの人に魔術の恩恵を供給できるから、というのが一番の理由だ。

そして二つ目の理由として俺はそこまで立派な攻撃魔術は揮えないということがある。

あんなもの頭が痛くなって使いたくもない。

エンジニアは製品の理論構築などを担当するので、俺向きの職業といえた。

そして先ほどの「ワースト」に俺も該当する。

俺はもとのままでは不合格だった生徒で特別な力を

受けて入学したのだから当然といえば当然の措置だろう。

エリートや一般生徒から高圧的な態度を受けるのは非常に厄介だけれど、

どうせ日常の範囲だろう。

「まあいいか。どうせ暇だし」

ある程度学校生活は刺激的でないといけなからな、と柄でもないことを口にする。

ずいぶん早く学校についた。始業までにまだかなり時間がある。姉さんに少しいじわるがしたくてそれだけのために早く出てきてしまったが

少し早計だったかもしれない。おかげで何もすることがない。購買にでも行こうかと一人でベンチに座って考えてみる。

「暇だな」

考えが自然と口に出てしまった。するとひとり呟く俺に声がかけられた。

「じゃあ購買行くの付き合ってくれねえかい？あ。ただし歩きで。」

突然声をかけられたことに驚いたがとめて普段通りに対応をする。その男の胸にバッジが存在しないことも確認済みだ。その少年は割と長身で細身の体は

しつかりと鍛えられており、しかしそれは不健康なものではなく、鍛えられた細身といった感じた。武道でも心得ているのだろうか。ただ立っているだけの彼に軸のブレは一切感じられず、打ち込む隙も……ってこんなことを言っている場合ではないか。しかしそれに反して彼の眼はへらへらと笑っている。

しかしこんな早い時間から何をしているのだろうか。あまり人のことは言えないが。

「お気遣いどうも。しかし俺はワーストだよ？こんな俺と付き合っていたらあんたが周りの方々に厄介がられてしまう」

相手はきつと一般の生徒だろう。

学校生徒のなかで一番割合の低いワースト同士が初日にばったり出くわす

なんていうのはほとんどありえない。さすがに初日の早朝から問題はおこしたくしな。

相手の顔をたてつつ俺は相手を自分のパーソナルスペースから相手を追い出していく。俺の常套処世術だった。

「誰もまだ登校してないから誰も俺たちを見てない。だから俺は困らない。

あ、それと俺もワーストだから。安心していいぜ。同じ落ちこぼれ同士仲良くしようぜ。

俺は九重霧杜。このえ きりこ お前は？」

といいつつ何も気にすることなく手を差し出してきた。俺は相手もワーストであるという事実に対し驚き、しばらく思索すると手を差し出した。

「俺は廓義宣人。よろしく。ちなみに歩くというのは大賛成だ」

九重はやたらに嬉しそうに手を握り返してきた。

その握力は想像通り力強く一種の「あいさつ」に感じられた。もちろん挨拶は返す。俺は気持ち強めに九重の手を握りしめた。

「おう。よろしくな。じゃばちばち行こうぜ」

それに気が付くと九重はうれしそうに笑って、手をほどき歩き出した。

想定外に早く生まれてしまった交友関係に若干の不安を覚えつつも俺は新鮮な感覚に心を躍らせて歩き出した。

隣を魔術をつかって滑りぬけていく生徒。そんな彼らの表情には魔術を行使せずに歩いている俺たちへの露骨な嘲笑が含まれていた。

「まったく。なんであんなに魔術使いたがるんだろうね。あんなの維持するのが大変で逆に疲れちまうよ」

購買からの帰り道に九重がつぶやいた。

彼らは自分の体の周りに風の魔術を流し込み空気の摩擦を軽減しつつ、

「浮遊」と呼ばれる別系統の魔術で地球の重力をある程度無効化する魔術を同時に行使することによって

地上を滑るように移動することを可能にしている。

その技術はこの学校の生徒ならばほとんどが行使できる初歩技術である。

その程度で疲れるなんて言うことはこの学校に入学できた生徒ではまずありえない。

九重も何かしらのわけありなのだろうか。

しかし九重のお茶らけた様子をかんがみるに俺が深読みをしすぎているだけだろう。

「俺もそう思うよ。何を急ぐことがあるんだろうね。歩くことはなんにも生きている感じがするのに」

俺は至極真顔で本心のように語った。

「お。哲学者だねえ」

それをみて笑いかけた九重だったが、俺の冗談とは思えない表情をみて追及をやめたようだ。

昔からの親友のようにどうでもいいことを語らいながら歩いていると反対側から進んできた生徒と肩がぶつかった。軽く触れ合う程度。しかし俺は迅速に反応した。

「すみません」

まず謝る。これが俺の日々を平和に生きるための黄金律だ。

いらない争いはすべきではない。より早く問題を解決するべきだ。

「気をつけるよ……」

男は俺のほうをまじまじと見てくる。何とも平凡な少し育ちがよさそうな男生徒だった。

あまりにも凄味がないのがんをつけられていることに気が付くのに30秒はかった。

「おい。おれはエリートだぞ。一般生徒。何か言うことはないのかよ」

確かによく見るとエリートの証であるバッジが胸で輝いていた。若

干の不覚だ。

しかし幸運なことにこちらがワーストであることに向こうは気が付いていないようだ。

「申し訳ありません。前をしっかりと確認していませんでした。以後気を付けます」

と言って軽く頭を下げる。

「ふん。自分の立場がよくわかってるようだな」

生徒は若干いらだちながらもそういつて満足したのか去って行った。

「…九重。ああいうのってどう思う？」

俺は男子生徒が視界から消えてから九重に問いかけた。九重の表情は先ほどとほとんど変化していなかった。

「うーん。確かにいけ好かないなあ。

けどそれがこの学園のあり方なわけだし仕方がない気もする。

それを理解したうえで入学しちまったわけだしな。

しかしエリートのみなさんってみんなあんな感じなのかね？」

さぞめんどくさそうに言う九重。気持ちにはわからないでもない。

「さあね。そうでないことを祈るばかりだよ」

「みんな同じ生徒なんだから仲良くしようぜい。な？」

といって肩をたたいてくる。こいつはかなり馴れ馴れしい性格のよ

うだ。

悪い気は別段しないが。

「魔術師長になるための大きな門出だ。きっとピリピリしてるんだろっ」

九重はその言葉を聞くと急に何かを思い出したようにして俺に質問を投げかけてきた。

「そういえばお前って名前に開祖の廓の文字が入ってるけどどっかの名家の人間だったりするの？」

九重のいう開祖とは魔法使い、廓図定のことだろう。

九重はただの興味で聞いたのだろうが俺にとっては苦虫をつぶしたような表情になる質問だ。

もちろん平静を装ってはいる。しかし内心は穏やかではなかった。

確かに俺は戸籍上そういう名前になっている。

あいつがそんな名前を付けるから…

「いや関係ないな。そんな名家に生まれていたら今ごろこんなところでワーストやっていないさ」

そんな俺の答える様子をまじまじと九重は見詰めてくる。

気取られたかと身構えたが表情を緩めて彼は言った。

「そりゃそうか。そうだよな」

なぜか妙にうれしそうな九重。

俺はこれ以上の追及を避けるために九重に質問を投げかけた。

「九重。将来はどうするつもりなんだ？」

「なんだよ急に……。まあいいか。俺は「警官」になるつもりだよ。体だけは丈夫だしな」

至極真面目そうに九重は言った。俺はその返答に少し戸惑った。

魔術師が言う「警官」とは同じ魔術師を取り締まる役職だ。

時には暴走した魔術師と戦闘を行ったりするし、もちろん負傷者、死者もでる

かなり危険な役職だ。とはいってもその仕事の内容は魔術師長、および戦争に投入される魔術師の下位互換といってもいい。

この学校に入学した生徒で「警官」を鼻から目指す人間などそうはいないはずである。いくらワーストとはいえ、この学校は名門中の名門だ。

九重の志願はすこしイレギュラーである。まあ、エンジニアを目指そうとしている俺の言うことではないが。

「なるほどね。戦争に興味とかはないんだ？」

「あんなおっかないのはムリ。ましてや人殺しだろ？かんべんしてくれよ」

相変わらずへらへらと彼は言う。

「けど「警官」も人殺しをしなきゃならないときがあるだろう」

「ま、それはそうなんだけど。なんか「警官」のほうが人助け感があるだろ？」

そういつて足取りを速める。これ以上語る気はないか……

なぜだか俺は初対面の人間からできる限りの情報を吸い出そうとする癖があるらしい。よくない。

「おい、いこうぜ。時間はあるっていつでももつそろそろだからな」
「ごめんごめん。まってくれよ」

控えるは始業式。俺の全く新しい生活が始まる。俺は九重の隣まで小走りをして校舎へ向かった。

1 - 3 巫女と魔術

俺と九重はクラスまでたどり着いた。

俺たちは1年R組。成績不振のワーストばかりが集められたクラスだ。

そこで自らのロッカーや備品を確認し、それを済ませて残りの時間を九重と別れ自分の席で

適当につぶしていると又しても声をかけられた。

「あ、あの…。」

声はか細くずいぶんとかわいらしかった。その印象につられて振り向くと

そこには時代錯誤ともいえる巫女さんが立っていた。

なぜ巫女さんかと判断したかと聞かれれば、

紅白鮮やかな巫女服が目に入ったからだ。

この学校は私服が許可されている。

魔術師にとって服装はとても重要な要素だからである。

身にまとう服に意味を持たせ、魔術の構成を補強できる。

その意味からも私服の生徒が多いこの学校では

何の問題もないのだがそれでも俺はその特異性にくぎ付けになった。

その女の子の背丈は並み程。長い癖のない黒髪が腰あたりまで伸びている。

その一本一本は絹の糸のようにつややかで、教室内でわずかに感じられる風に揺れるそれは

しだれ柳のようなしなやかさも持っていて純和風の美しさを感じさせた。

肩口のあたりでスパツと布が断ち切られ二の腕の中ほどから

振袖にそでを通すという一風変わった巫女服を着ている。

そのせいで色白い肌や脇がちらりとうかがえ、
ゆとりのある布使い、揺れる振袖がいまって妙に色っぽかった。

「こんにちは。どうしたんですか？」

静かに。礼儀を持って接する。

「えっと。廓義宣人さんですよ？ええっと…」

何やらおどおどとしている少女を気遣って声をかける。

「そんなにかしこまなくていいよ。あ。少し俺が固くしゃべってたからかな。」

わるい。なにか用があつたら遠慮なくいつてよ。」

少し口調を砕いて接してみる。

どうやらあまりコミュニケーションが得意な子ではないようだが
俺の対応はどう考えても同年代の女の子にする態度ではなかったな。
反省反省。

そうして少女の返事を待っていると想像以上に大きな声で
想像の斜め上に行く発言が少女の口から飛び出した。

「わ、私…付き合ってください！！」

教室のどこかで九重がすつころぶ音が聞こえた。律儀な奴だ。

俺は反射的に少女を凝視した。瞳孔の拡張、皮膚からの発汗などは
見受けられない。

その眼は迷うこともなく俺を見つめている。

そしてその頬はわずかに上気していた。嘘の可能性は…ほとんどの

い…か。

今回ばかりは「まあ暇だからな。」とかいつていつも通りに受け流すことはとてもできそうな問題ではないようだ。よし。ここは冷静に…。

「あの。廓義さん、どうでしょう…。教員室まで付き合ってくださいませんか？」

少し冷静さを取り戻した少女が付け加えた。
あれ？

「えっと、付き合うつて？」

「はい。先生に資料を運ぶのを頼まれてしまつて。それがすごい量らしいのでクラスの宣人って人に頼むといいつて言われたんです」

「……あ。なるほど。わかりました。はい」

まさか俺のメンタルがここまで削られるとは思わなかった。しかしある意味当然のことだな。そんな一目ぼれとかされても困るし…。うん。

まさか俺が嘘を見破れない人間なんていたのか…。俺は当てが外れたことと嘘を見破れなかったシヨックから宣人という名前が現れた不自然さに気が付かなかった。

「あれ…もしかして廓義少年なんか期待してた？」

目を子供のように光らせて近寄ってくる九重。
さっきまでは教室のだいぶ離れたところにいたはずなんだが。

「そんなことはない。俺がそんな玉に見えるか？」

内心、実はかなりどきまぎしながら俺は答えた。

「あれ廓義。もしかしてこういうのだから人だと思って期待してたのに。残念…」

九重はしばらく俺を凝視した後そういつて九重は残念そうに顔をしかめた。

会話の流れを変えようと口を開こうとすると九重が先に声を上げた。

「って廓義はそう言ってるけど実際どうよ？廓義のこと。どう思う？」

お前。そろそろ自重しろ。困ってるぞ。女の子。

「ええっ！！わ、私は…えっと。かわいらしいですし、癖のある黒髪も愛らしいなと…」

少女よりも俺が困った。ほめてくれるのはとてもうれしいが俺はかわいくない。

なんで周りは俺をかわいいというのだろう。姉さんには

もう飽きるほど言われつくしたので抗体ができたが、

同年代の女の子に言われたのは初めてでうろたえてしまった。

女の子が相手だし不機嫌になるのはまずいだろう。抑え込め…。我ながら小っちゃい男である。

補足するが男に言われていれば理性を保てる自身がありません。

「ありがとう。君もとてもかわいいね。名前はなんて言うの？」

少しのいじわる心を持って質問を返す。

俺の悪い癖だが今回は騙された(？) 恨みがあるのでやめようとは思わなかった。

「かわいいだなんてそんな…」

廓義君のほうがとつてもかわいらしくってその…ぽっ

手を胸の前で組んで体をもじもじさせている女の子。

最後の「ぽっ」がともかわいらしかったがいったいなぜそうなったのだろう。

なぜかそこは突っ込んではいけない領域な気がしたので会話の起動修正をする。

「それで…名前は？」

「ああっ！ごめんなさい。私は不知火帳しらぬいとうといいます。帳でいいですよ」

そういつてはにかんだ。

不知火と言われればこの国で魔術を学ぶもので知らない者はいないだろう。

この国では魔術は根源でいくつかの系統に分類される。
一つは陣術。

もつともメジャーである魔術であり汎用性が一番高い。
名の通り陣を作り上げそこに魔術を発生させる術だ。

そもそも基本的に魔術とは魔術の情報構築力と具現子の創造力によって構築される。

魔術を行使するにあたってまず最初に行うことは個人の脳内での魔術情報の構成である。

魔術のイメージを脳内で高め、情報を整理し、術式のシステムを作り上げる。

それが「構築」である。

これは発動させる魔術の設計図のようなもので、これがゆがんでい
ては発動は成功しない。

魔術の構築速度が優れているものほど魔術の発生が早く、
情報の処理容量限界が高いほどに規模の大きな魔術を構築できる。

しかし規模の大きな魔術になればなるほど、脳内で処理すべき情
報量が増大することから

術師への負担は増大し、発生までの時間も延長される。これを短縮
する際に用いられる手法が詠唱である。

イメージをより速く正確に脳内に浮かべるための手法であって

詠唱は個人によって異なり、その術式をもっともその個人が
思い浮かべられるように語句をつないだものだ。

それは一種の自己催眠でもある。

そして詠唱によって高められたイメージを術式の形に構築し、
外界に放出すると世界のあらゆるところに存在する具現子に作用す
る。

具現子は受け取った魔術情報を形にしていく特性がある通常不可視
の物質だ。

この具現子に魔術情報を作用させる際に必要になるのが魔力である。
魔力は魔術情報を外界に出力する際に発生する手数料的なもので、

その術式の情報量に比例する。

したがって広範囲に作用する魔術や、破壊力の大きい術、精密な魔術ほど多くの魔力を消費することになる。

いくら情報量が多い術式を構築できてもそれを変換する手数料が払えなければ魔術は発動しない。これを超えて具現子に作用しようとする

多くの場合魔術情報の暴走が発生し、情報を管理する大本である脳に大きな障害を及ぼす。

ゆえに魔術の行使の限界を定めるこの力は魔術師にとって重要なファクターになる。

そして魔力の特徴として最も大きなことは魔力量は生まれた時に決定するということである。

こればかりは生後にどのような特訓を行おうと成長はしないというのが現在の魔術の常識だ。

そして魔力は魔術師と一般人を分ける要素でもある。

そして具現子は魔術情報を受け取ると可視化され、その情報に対応して緩やかに変化する。

しかしその変化は緩慢なもので戦闘にはとても使用できる速度ではない。

そこで必要になってくるのが具現子の「創造力」だ。

具現子の動きを理解し、その形態変化を統制する技術でこれが優れているものほどに、魔術の完成がはやく、緻密な術式を構築できる形づける行為は方向性、ひいては魔術に意味を付けることになる工程で

非常に重要である。盾の形にすれば防御力が。鉾の形にすれば貫通力が上昇する。

これが精密なものほど術が精度の高いものになり威力も上昇する。

そして不知火家に代表される陣術と呼ばれる魔術はその創造力の部分を陣で補っている。

詠唱と同時に陣を構築。詠唱して高めた魔術情報を放出するとそれをあとは陣が自動で創造し形成する。

そしてこの陣を構築するのもやはり具現子である。

陣術師はまず最初に陣を魔術で作り上げる必要があるのだ。

しかし熟練したものが扱えばその陣の構築には一瞬と掛からない。

陣術の最大の利点は練り上げた情報を陣がコントロールし、創造してくれるために、

おおきな情報量を持った術を振るえる点にある。

陣の強度、精度が高ければ自らの具現子の創造力とは不相応の術を行使できる陣術は

名家伝統の秘伝にされることが多い。

なぜならその陣を子に受け継ぎ、その子は術式の情報処理能力、つまり構築力だけを磨けば、効率よく強力な魔術を

扱うことのできる魔術師を作り上げることができるからである。しかしその陣の構築こそが陣術師としては最大の課題になる。

その構成はめったに知れ渡ることではなく、その家の中でのみ受け継がれる。

では目でその陣の情報を盗むことは可能なのか？

答えは否である。

確かに魔術を振るう時に陣は目に見える形に成形される。

しかし陣の形、機構を判断し自分のものにするには

すさまじいほどの情報処理能力が必要になる。

実質的に他人の陣を参考にすることは人間には不可能な領域でありそれが可能なのは二人目の魔法使いであり「投影」を所持していた廓図津奈木ぐらいであろう。

陣術が一般に広く使われ、多くの使い手が存在する理由はその情報の機密性と

知識の蓄積が各家で可能であること、扱いが容易であることにある。

そして不知火はその陣術の名家だったはずだ。

その家が扱う陣は火を扱うことに特化し、過去の記録では当時の当主が

小国一つを被う陣を構築し焼き尽くしたという恐ろしい記録も残っている。

そんな名家の少女がワーストというのは簡単にはうなずくことができないことだ。

巫女の一族、不知火家が伝統とする陣は確か第一女子へ引き継がれるはずだ。

そして不知火家には女子が一人しか誕生していないことになっていたはずだ。

いったいどういうことだ…と思索していると

帳は九重との会話のなかでその質問のヒントを簡単に打ち明けてくれた。

「私、どうも家の陣に嫌われてしまったようで…うまくいかなかったんです」

まるで陣が生き物であるかのような発言だが謎は解けた。

彼女は二つ目のタイプの魔術師だったようだ。そのタイプとは先天型。

その名の通りに先天的に宿る魔術だ。

その特徴は一つの特性に特化していること。

さまざまな系統のものが扱えない代わりにその規模、術の完成までのスピードは目を見張るものがある。

しかし基本的な魔術発生までの流れは大きな違いは存在しない。

陣の役目をそのまま自身の肉体で代用しているのだ。

陣とは異なり、陣を作る魔術を行使する必要はなく、肉体という人間の存在の根底に近い部分を礎にしているためその強度、精度は計り知れない。

その力の大きさは各人によって大きく異なり、術の特性も個人で大きく差がある。

区分が難しい存在でその発生にも規則ははまだ発見されず、まさしくイレギュラーといえる。そして先天性の魔術師は陣術に適合できないことが多い。

理由はいまだに説明されていないが魔術発動の際に、個人の肉体にしみこんでいる

先天性の具現子の創造機構と新たに構築した陣の間で魔術情報が互いに干渉してしまい

どちらもが不安定になってしまうからだといわれてる。

そしておそらく不知火家のイレギュラーだとするならば…そこで不意に九重が声を上げた。

「おい。なに一人で静まってるんだ？そんなにショックだったのか？」

急に九重に声をかけられた。思慮にふける俺の姿は確かに不自然だった。

「いや。そのことじゃないよ。大丈夫」

少しの反省だな。気を付けよう。

「あの。廓義さん。そろそろ職員室に行きましょう。時間が迫りますし……」

さきほどと比べるとずいぶん打ち解けたしゃべり方をしている。

本当は人懐っこい性格なのかもしれない。

「こう見えても力には自信があるんだ。行こうか。」

そうして冗談で手を差し出すと帳は以外にも笑顔で握り返してきた。いよいよ俺には人間的にも、経歴的にも帳がどういう人間なのかを理解できなくなっていた。

1 - 4 HRと担当教諭

帳とともに職員室までの道のりを歩く。

この学校はとてつもなく規模が大きいので歩いて移動するのはなかなか難儀だ。

知り合いのクラスに話をしに行こうものならその移動だけで休み時間が終了してしまう場合もある。

まあ俺にはそんな知り合いはいないが。

不知火はというと何も言わずとも魔術を行使せずに歩いてついていた。

俺は単純に興味本位で帳に質問をした。

「担当の先生つてだれだっけ。」

なぜか帳はなぜか嬉しそうな顔をして即答してくれた。

「京先生っていう方らしいですよ。何でも美人の新任の女性教師さんだそうです。」

……いやな汗をかいてきた。まさか。

同名の人物くらいこの世の中にはたくさんいるよな。ありえないよな。

そういつて自分を信じ込ませながら俺は足を進める。

不知火の発言は聞き捨てならない。

もしそうであるならば俺の学校生活は終了したといっても過言ではない。

まさか黒髪の藍色の目をしたわがまましかいわない、

割と美人の女性なわけではない。そうであってはいけないのだ。

しかし。まさか。そんな。と自己暗示をかけていると帳が丁寧にも

ダメ押しをしてくれた。

「何でも「雷神」って呼ばれているすさまじい方だそうです。そういえば宣人さんのことを知っているみたいな口ぶりでしたけど知り合いなんですか？」

あ。終わった。俺の緩やかで安泰な高校ライフは終了した。そういえば先ほどは見逃していたが先生が名指しで帳に俺に手伝いを頼むよう伝えたことはとても不自然だ。

そして俺の知る限りそんなたいそうな二つ名をもつ魔術師は一人しかいない。教員室の目の前にたどり着いた。少しおながが痛い気がする。

「帳。俺少しおながが痛いみたいだからトイレ行ってきていいかい？」

べたな逃げ方だが許せ。俺は先生とあつてはいけない。

「もう少しなんだからがんばってください。」

帳は思ったよりスパルタだった。

「やばいんだ。かなり。いてて……」

「大丈夫ですか。ええと。どうしましょ……」

急にうるたえる帳。やはり優しい子だ。しかし今回はそれを利用させてもらう！

「トイレ行けば治ると思うからちょっと待っててくれ」

といってそこを離れようとすると帳が何かを思い出したようだ。

「あ。そういえばお薬持っていました。ちょっと待っててくださいね」

といって薬を探し出して差し出してくる。優しさが過ぎるだろう……。万事休す。俺はそれを受け取って飲むふりをする。先生との邂逅は避けられないようだ。

「だいぶ良くなったよありがとう」

もちろん最初から調子など悪くない。

「いえいえ」

どうやら俺はこの子にはかなわならしい。

意を決して扉を開ける。そこはよくある教員室であった。先生方はプリントをまとめそれぞれの教室へ向かっていく。ただ一人の女性を除いては。

「あれ。あの書類どこだっけ。あれ。

これ片付けないと。も〜。ものが多すぎるのよこの机!〜。」

いきなりきれた。理不尽すぎる。

机の上には明らかにその女性のものとしか思えないガラクタが転がっていた。

俺はたまらず進み出た。

「姉さん。この書類はこつち。んでこれはそつち。あと歯磨きは学校に持ってこなくていいから。」

「そうね。ありがとう宣人。って宣人なんているの？」

あ、お姉ちゃんが心配できてくれたの？ありがとう

そういつていつも通りに飛びついてくる姉さんをすらっと避ける。

「よんだのは姉さんでしょ…。それよりも姉さん、ここの教師になつてたんだね。」

「そうなのよ。正直めんどくさかったんだけどね。」

理事長にお願いされちゃって。断りきれなかったの。」

新しい職業が見つかったというのはこういうことだったか。しかし理事長クラスと交友があるとはさすが「雷神」だ。

しかし理事長、どういっつもりだ。俺を招きながら姉さんまで。いじめか？

「で。まさかとは思うけど1年R組の担任って姉さん？」

「うん。一年間よろしくねっ。」

「……そうですか。それでは先生。ホームルームの資料をください。クラスに持って行っておきますから。」

あくまで俺は一人の生徒としてふるまう。過敏には反応しない。

「じゃあ宣人。これとこれとこれとおねがいね。」

どさつどさつどさつ。結構な重さの紙の束が俺の腕に乗つけられる。まあなんて言うことはない。あと名前でもいつも通りに呼ぶのはやめてほしい。

となりでは帳がぼかんとしている。

「廓義君って力もちなんですね…。意外です。」

「ああ。これでも一応は体鍛えてるからな。」

想定外の質問だ。助かる。てつきり俺と姉さんの関係でも問われるのかと身がまえていたんだが。

「あれ宣人。あんたが苗字を呼ばせるのって珍しいわね。どうしたのかしら？もしかしてこれ？」

といってニヤニヤしながら小指を立てる京先生。間違いなく先生のしている仕草ではない。

「それでは「京先生」お先に教室に向かっておりますので。」

片づけをすべて終え、それを無視して俺たちは教室へ戻った。

教室への帰り道に帳が思い出したように俺と姉さんの関係について問いただしてきたが

軽くごまかしておいた。その中で「教師と生徒。兄弟…。はわわわ」といって赤くなっていた。なぜそうなったのかはまたしてもわからなかった。この子は謎が多い。

帳とともに教室に戻ってそろそろ5分が経過する。

しかし気を抜いてはいけない。なんといつても俺たちの担当教師はあの京なのだ。

教室の席で静かに京の到来を今か今かと待ち構え、

視覚、聴覚、嗅覚、空気中の具現子の動き、すべてに神経を研ぎ澄ましていると、

廊下に人の歩く気配が感じられた。

それは次第にこちらに接近してきた。

歩幅から考えて身長は170程。足音の特徴から少しヒールのある靴を履いていると推測。

性別は女性。ということとは…。そして扉の手前で立ち止まった。

何をしているのか探るためにさらに感覚を鋭敏化。

その瞬間、その人間の周囲の具現子がありえない速度で運動を開始した。

刹那、轟音。

廊下が光でいっぱいになり、廊下方向を向いて話していた生徒はあまりの閃光に目を押さえている。

そうでなくともほかの生徒は爆音に耳をやられて平衡感覚を失っている。

俺もあと一瞬魔術障壁を張るのが遅ければ危なかった。

今ごろそのあたりで目を押さえながらのた打ちまわっていたかもしれない。

今、行使された魔術はおそらく「叫雷^{たけび}」。

名の通り雷系列の魔術で具現子を高速で振動させ、光の特性を持たせることで発生源の中心から周囲に

激しい閃光と轟音を巻きちらす初步の魔術である。

創造が容易であるこの術は法3の生徒でも多くのものが扱えるがこの規模、そして具現子の運動開始から魔術の発動までの時間をか
んがみると

その創造力はとても高いもので並みの魔術師ではないことは明らか
だった。

そして開く教室の扉。そこには予想通り…

「はい。こんにちは。今日からみんなの担任になりました。光京ひかきょう
です。

よろしくね。」

京が立っていた。

俺以外はおそらく誰も聞こえていないだろうに自己紹介をする京。

「京先生…。何やってるんです…」

「やっぱり初授業だしみんなの様子とか実力を知リたかったし。

こうするのがわかりやすすくないかしら。ちなみに今の反応できた
ら群の中でも

それなりのクラスの反応速度だからね。ほこっていいわよ」

「俺たちは成績の良くない代表みたいなクラスです。

それぐらいわかってますよね。それにいきなりそのクラスの反応力
を試すのは

エリート相手だとしてもいかなものかと。」

俺は姉さんのいつも通りさにあきれながらも冷静に返す。それに対
して京は澄ました顔で答える。

「あら。そうかしら。案外無事な人も多いみたいよ」

そういつてニコリと笑う姉さん。そんなことはない俺はあたりを見回す。

しかしそこには京の言うとおり3人、先ほどの影響を受けていない人間がいた。

一人は九重。相変わらず席にだらしなく座って漫画を読んでいる。そして帳。少し先ほどよりおどおどとしている程度の変化しか見られない。

あと1人は名前を知らない男子だった。整った少し強めの顔立ち。短い銀髪と銀色のフレームのメガネがよく似合うさわやかな男子だ。しかしその眼は研ぎ澄まされた刃のように鋭く、とても遠くを見つめていた。

「しかし力抜いてたっていつでもショックだなあ。4人ね。面白くなりそうだね。宣人。」

「こつちを見ないください。先生。」

しかし俺は感じていた。大きな違和感を。俺の読みでは自分以外にあの轟音と閃光からは身を守れないと思っていた。

あれから完全に身を守るためには目を閉じ、耳をふさぐことでは間に合わない。

目と耳、両方を共に守り抜くことはその方法では不十分だ。

この魔術に対する対応方法の最善策は具現子の運動開始を最短で感知し、

その運動パターンから術式系列を判別、魔術の効果判断後に轟音、閃光に備え自分の身体表面上に薄く魔術的な障壁を展開することだ。しかしこのためにはたぐいまれなる情報処理能力が必須になる。

それだけのことを実践できる人間がそういていいはずはない。

あの叫雷を完全に防ぎ切った九重、帳、

そして銀髪の少年の反応力はその域に達していると考えていいのだろうか。

反応力、分析力だけに特化しているのか。

それとも常に自らの周りに魔術障壁を展開している？

しかしそれは彼らの実技の成績を考えるとかなり厳しいはずだ。

それならば別の方法で自らを守っているのか？

そうして思慮にふけっていると担任の京が声を上げた。

「はい。じゃあみんなが落ち着いてきたからホームルームを始めるわね。礼。」

そして大きな疑問を抱えたままに俺の波乱に満ちた学校生活が始まった。

1 - 4 H Rと担当教諭（後書き）

この次の回から前身とは全く異なったパートが入ります。どうぞよろしくおねがいします。

1 - 5 勧誘の喧騒

その後のHRは一年間の学事予定について確認を行った。今日は学校開始初日なので学校の日程はこれでおしまいのはずだ。

「ではこれで今日の説明はおしまいね。あ、けど今日は新入生の歓迎のためのセレモニー……というか部活動の勧誘とか紹介があるから興味のある子は広場とか体育館とかいってみてね。みんないろんな目指すところがあるかもしれないけど息抜きも必要よ。じゃあね」

姉さんはそういつて教室から出て行った。するとこの教室の生徒たちも動きだし、瞬く間に消えていく。広場へ向かう人、研究所へ足を延ばす人、はたまた初日から生まれた友人と語らう人、さまざまであつた。書く言う俺も最後の分類に含まれる。

「廓義、お前はなんか所属する予定でもあるのかよ？」

隣にはすでに九重の姿、相変わらず早い。かと思えばその後ろから帳もやってきた。

「俺は特に予定なし。特に秀でた芸もないしさ」

「そうなのか？ それにしては足運びとか、武道のそれっぽかったけど、気のせいかな」

「あ、そうでしたよね。私は和弓をすこしやっているんですけど、日本武道の動きに似ていたような気がしました」

驚き。二人にそこまで見えるものだったか。

「気のせいだよ。俺のこんなひよろい体で武道って、すぐやられちゃうよ」

「だな」

九重はきつぱりという。少し悲しい気分になるのはなんでだろう。

「けどそんな二面性があったら素敵ですね……こう、本気を出したらすごいぞーみたいな……」

なにやら目を虚空にさ迷わせている帳。相変わらず謎だらけだ。これ以上の追及はまずい、そう考えて話を振った。

「帳は弓道部に入るのかな？それとも弓術？」

「私はもっぱら和弓一筋です！とはいっても魔術が得意でない言い訳みたいですけど……」

弓術とは魔術を用いて弓を扱う術だ。元来日本武道において「術」とは相手を死に至らしめる方法のことだ。ゆえに昔、柔術は柔道と改められ競技化されたそうだ。そして弓術は魔術によって精度を高めた弓でもって遠距離におかれた小さな的に向かって矢を放ち、12本中の的中数を競う。強者の魔術によって御された矢は数キロ先の豆すらも射止めるという。それは戦争においても用いられる人を殺す術だ。

「そんなことないだろ。あんな機械みたいな人殺しの練習みたいな競技より麗しい少女が袴をきて弓を引いているほうが絵になるし」

「九重の言い分は分かるよ。後半はまあ、九重らしいが」

「そ、そうですね？」

「そりゃあもう。な、廓義？」

九重が満面の笑みでこちらを見てくる。仕方ない、合わせるか。

「そうだね、事実、帳の袴姿はとても映えそうだ。いまの巫女服もとても似合ってるもんね。かわいいよ」

そういつて俺は笑顔で帳を見るのだが、なぜか顔を真っ赤にしている。その様子に戸惑って俺は九重のほうをうかがうのだが彼もやれやれといった風に首を振っている。どういうことだ？

「廓義少年、君、危険人物だね」

「なんでさ！」

聞き捨てならん。「おっさん」によく言われているだけにそのフレーズは苦手なのだ。

「いや、なんていうの？天然……の一言で片づけていいのかな」

「意味わかんないよ、わかりやすくいつてくれ」

「……詐欺師？」

「意味が全く分からないけど不名誉くさいからやめてください」

俺たちが全く身のないやり取りをしておる間も帳はなにやらもじもじしていた。

「んで、九重はどうするんだよ？」

「俺か、俺は入る気はないけど剣術部をのぞきにだけ行こうかな」

「剣術……ってなると警官志望だからってことか？」

「まあそれもあるんだが個人的な趣味だよ」

「剣道、ではなく？」

こいつが「道」、ではなく「術」のほうを選択するとは思わなかつ

た。剣術も弓術と同じく魔術を用いた競技である。魔術によって強化された剣閃を持って相手を淘汰する。戦争でも大いに用いられる白兵戦の一つの戦法だ。

「今日は演舞があるらしい。それだけみてみたいんだよ。人殺しながらまっぴらごめんだ」

そういつて万歳。

「わかったよ。じゃあそこを目指していこうか？」

「演舞までは大分時間があるから大分うるつけると思っぜ」

「なら少し技術部をのぞいていいかな」

「かまわないぜ。廓義はもしやエンジニア志望が」

「そう。ドンぱちするのは得意じゃないから」

「なるほどな。じゃあいこうぜ」

「ああ。帳。ということなんだけど付き合ってくれる？」

俺は隣で相変わらず何やらつぶやき続けている帳に声をかける。

「えっ。そんな…急すぎますよ。廓義さん…。私たちまだ出会ってから一日もたっていないし…」

……俺は以前にもこの感覚を味わった気がする。デジャブというやつだろう。ただし立場は逆だった気がするが。誤解を正すために俺は言葉を紡ぐ。

「えっと…。部活の勧誘とか演舞を見て回るのに付き合ってくれない？」

「あ…。えっ。そういう意味でしたか。そうですね。まさか廓義さんが…。申し訳ありません。私…つい。興奮してしまって」

少し残念そうに帳は言った。何に興奮したのだろうか？女の子というのは分らない。

「帳ちゃん。俺は別にそういう意味でのお付き合いも可能だけど？」

隣で九重が瞳を輝かせて尋ねる。馬鹿だ。

「不潔です。死んでください」

帳の普段からは想像しがたい言動に俺は一瞬だが寒気を感じた。しかし「普段」を知りえるほどの月日を過ごしたわけでもないので決めつけるのは早計だったかもしれないな。

「じゃあ行こうか」

隣で死んだ魚のような目をしている九重を無視して俺と帳は歩き出した。

「それにしてもすげえ人だなこりゃ」

「勧誘に必死って感じたね」

「少し怖いくらいです……」

広場は喧噪に満ちていた。様々な部活の生徒たちがひしめき合って新入生を捕まえていく。

「んで、技術部ってどこにあるんだよ」

「広場での勧誘をするような部活じゃないから、部室棟で普段通りに活動しているらしいよ」

「そしてその部室棟は……」

「ここを避けずして向かえないと……」

そんな理由で俺たちは立ち尽くしていた。目の前には人の海。この荒波を超えなければ部室棟にはたどり着けない……やる気なくなってきた。

「まあ、俺のみたい演舞の会場もここは通ってかないといけないし、いつてみようぜ」

「気は進まないけど……そうしようか」

「帳ちゃんほら、迷子になるといけないからお手を拝借……すいません」

九重はあいかわらずセクハラまがいの絡みを続けているが帳の鋭いまなざしに沈黙する。

「今のは普通に失礼だぞ、九重」

「ああ、俺も言ってから思った。ごめんなさい」

「別にいいですよ……」

なにやら帳から黒いオーラが湧き出している気はするがスルーだ。まあ、九重の今の対応は子供扱いに近いものもあるし、仕方がないであろう。

「よっしゃ、じゃあ俺が道を作る！二人は続いてくれ」

「何カッコよく言ってたんだよ……帳、いくよ」

「はい、廓義さん」

俺たちは喧騒をかき分けて部室棟を目指した。

1 - 6 異様な部室棟

「まだかよ……」

目の前の九重がつらそうにいう。彼の顔からは汗がしたたり落ち、その表情は険しく、肩も大きく上下している。

「道のりは長い……ですね」

後ろの帳も何とか遅れまいとついてくる。周りには意気揚々、勧誘に励む生徒であふれていた。大きな声が飛び交い、人々が密集しているせいか、熱気に埋もれていた。

「どうしてこうなった」

「そりゃ、お前、この時期の勧誘は重要だからだろうが」

九重が汗を拭きながら言う。俺たちは部室棟を目指して進み始めたのだが人の波にもまれ、まっすぐと進めず、右往左往。どれほどのときを歩んだだろうか。そろそろ対岸が見えてもおかしくはないはずだ。

「春の気温じゃない……」

「これだけ人がいればそうなるだろうよ。だれか氷系統の魔術でひやしてくれねえかな」

「私は火しか扱えませんが……ごめんなさい」

「俺も無理。というか魔術が無理」

「じゃあなんでここにいるんだよ……廓義。まあいい。そろそろ抜けられるはずだ」

九重は俺たちの前に道を作ってくれている。すぐにへこたれるかと思っただが案外に貫き通す男のようだ。

「やっとだな……つと!!」

九重が最後の人垣を突破した。そこから涼しげな風が流れてくる。

「越した……やっとだ」

「疲れましたね……」

俺と帳は満身創痍。ふだんならば温かいと感じるような春の日差しもいまや涼しげなそれだ。

「つたく、やつてる当人の気がしれないね」

「本当だよ……んで部屋棟っていうのは？」

「この先ですね。あの立派な建物ですよ」

帳が指をさす。振り返ればそこには白い四角い建物があった。芸術性を完全に排除したような完全な立方体。しかしその一様な表情は一種の不気味さ、そして独自性を生み出していた。あの建物には文化系統の部活動の部室が入っていて、俺が目当てにしている技術部もあそこに部屋を置いている。まるで知恵の箱舟、そんなイメージの建物だな……

「立派か？ずいぶんと無機質で気味が悪いような気もするけど」

「不気味には同意。けど俺は嫌いじゃないよ、少し意味がありそうだね」

「意味……ですか」

「たぶん魔術的な意味がある。まあこの距離から見ただけじゃまったくわからないんだけど」

二人がなんだか目を見開いている。どうした？

「廓義さんって案外「できる子」なんですネ」

「ああ、意外だ。人が良いだけかと思っただけ」

なんだこいつら。ほめられているけどけなされている気しない。

「それでもエンジニアを目指す身なんで。工房って知ってるでしょ？」

「建築様式に魔術的な構造を組み込むことによってそこを一種の要塞にする……もしくは快適空間にする、みたいな奴だったか？」

「そう。あの立方体にはそういう「意味」がある。魔術は自分の想像を具現子に作用させて発生させる現象だからそれを自分が作った建物から出力させているってわけ。自分の想像、意思はあの建物に染みついているだろうからね」

俺たちは部室棟の目前までやってきていた。天高くそびえる施設は異常性の塊だ。異界の入り口、そんなイメージ。

「それである建物……工房にはどんな意味が？」

「ちよつと……というかだいたい嫌な予感がするんだけど……」

「どうした？」

「たぶんあれ、快適空間のほうじゃないね。要塞」

「……なんでまた校内にそんなもんが？」

九重が頭に手を当てていう。あの熱気から解放されて次はこれ、気持ちわかる。

それにしても、あの人はまたとんでもないものを作っているのね。

「たぶん部長の趣味だね」

「知り合いなんですか？」

「知り合いってほどでもないんだけど……よく杖の調整を頼む人でね。何度か会っただけ……」

陣術師は本来、魔術の完成のために高度で文字数が多く完成に時間が多く必要になる詠唱による魔術情報の構築と陣の形成が必要であったが近代魔術の進歩はその速度を被いに向上させた。その立役者が「杖」と呼ばれる装備品だ。

「杖」は個人が使用したい術の陣と魔術情報を記録できる媒体である。

陣術師は「杖」にたいして自分の使用したい術式のイメージをデータとして出力する。それをつけた「杖」は逆に術の発動イメージである詠唱を使用者の脳内に直接出力する。詠唱は魔術師個人の魔術情報の固定化、すなわち一種の自己催眠が目的とされているので実際にそれを唱える必要性はない。杖から脳に直接出力された術式情報をを用いることのほうが自らの口から詠唱を紡ぐことよりはるかに効率がいいのだ。たしかに「杖」の行使と詠唱を同時に行うことでさらに術式情報の厳密化が可能であるがそれと術の連続性を天秤にかけると後者に軍配が上がる。さらに杖には情報処理の一部を肩代わりする機能が施されていて、魔術師の情報処理負担を軽減する。そして陣の形成も同様で「杖」にたいして陣の情報を入力し、あとは「杖」が自らに記録されている陣を外部の具現子に出力する。「杖」の登場によってこの二つの作業を並行して迅速して行えるようになり、その術の大きさに左右されるが陣術行使までの時間は短いもでは一秒ほどにまで短縮された。

「杖の調整を頼む人なのに知り合いじゃないってどういうことだ？わざわざ個人で頼むぐらいなら結構な面識があるんだろうに」

「いや、たしかに顔は知っているし人柄も知っているんだけど……」

「もったいぶるなよ。つまり？」

「簡単に言えば、杖と技術畑の人間にしか興味なし。偏った変人さ
んだよ」

「それはまた……」

俺たちは部室棟のドアに触れる。それはすんなりと俺たちを中の世界にまねいてくれた。あやしい……

周りもやはり白一色。壁と床、天井の区分すらもあいまいな程に白一面。まっすぐ歩くことすら難しい。自分がどこにいるのかわからなくなりそうな白い混沌。

「なんだここ。気持ちわりい……」

「あまり長居はしたくないですね」

「さつさと技術部の部屋まで行こう。きっとそこは個々みtainな異界じゃないよ」

そついつてあたりをうかがう。階段、スロープ、エレベーターさまざまな方法での昇降が可能だがあたりはどれだ？

「階段で上がっておいで、黒星のホルダー君。調整もそろそろ終わる。君ならば案内のものはいるまい」

突如として白い空間に女性の声が響き渡った。澄んだ声。無機質な拡声器を通したようなノイズもなかった。

「魔術ですね……」

「ここは彼女の空間だからね。ここに存在する具現子は彼女の思いのまま。逆に俺たちに動かすことはできないよ」

「具現子に音声情報をのせて俺達まで飛ばしたっていうことか」
「そう」

俺たちは指示された通り目の前にある階段を上る。するとそこには階段の下と何ら変わらない風景が広がっていた。

「けど階段でこいつっていつてもこつから先がわからないじゃないか。おーいもう一回教えてくれよ」

九重が後ろで天井を見上げている。

「必要ないよ。こつから先はもう知っている」

「一度来たことがあるんですか？」

「いや違うよ。さっきの音声データがどうやってここまでやってきたかを逆探知しているだけ。簡単だろ？」

そういつて俺は右に曲がって壁にしか見えないところに手をかざす。するとそこに青い陣が浮かび上がった。幾何学的な文様にあしらわれた円形の陣は壁の上で回転を続けている。後ろでは二人が息をのんでいた。

「お前そんな高度な技術扱えんのかよ」

「逆探知くらいなんてことないよ。できる人もたくさんいるでしょこの学校なら」

「いや、たしかにそうだろうさ。それならこんな成績じゃないだろう？」

「ほら、あの試験って人を殺す術をはかるでしょ。俺にはその手の素質があんまりないわけ」

「なるほど……逆探知技能はそこまで「成績」には含まれませんか
らね」

「そ。そういうこと。よし、あいた」

壁のように見えていた空間が無にかわる。そこに固定されていた具現子がその情報を失って霧散したのだ。その先には6つのディスプレイに囲まれた少女がいた。青白いディスプレイの発光に照らされながら目の前にずらりと並ぶキーボードをたたく。長い、長すぎる紫色の髪の毛が椅子の背もたれを被いかくし、地面にまで至っている。椅子の下には投げ出された足がちらりとうかがえるのだがそれは地面まで到達していない。

「きたね、^{ヘイン}黒星君」

振り返らずに彼女は言う。その声は幼く、か細い。

「人のことを杖の名前で呼ぶのはやめてください、^{つく}造里さん」
「おい、あの髪の毛の塊は……」

後ろで九重が口をかくしている。やめとけって……

「私は^{つく}造里明という。それでも一応有名な杖開発者らしいぞ」

振り返らずに彼女は言う。具現子はすべて彼女のもの。この場の拳動はすべて悟られる。しかし彼女が今の小声を拾ったことより二人にはその名が与える影響力は大きかった。

「え……造里さんってこの国随一の杖の開発者の方じゃないですか！」

「まてよあの杖作つたのって！」

二人そろって声を上げる。

「うるさいよ。君たち。こっちは最後の調整中なんだから静かにし

ておくれ」

凜とした声が響く。今までよりもずっと大きな声。具現子を通じて響いてくる。

「黒星君^{ヘイシン}。隣の部屋でもう少し待っていてくれ、じきに終わる」
「お願いします」

俺は隣の部屋につながる壁に手をかざす。二人は無言で着いてくるが俺の背中には好奇の視線が突き刺さっていた。

「こりゃ、一人で来るべきだったな……」

ぽつりと漏らす。

「君は存外、阿呆か」

造里さんが律儀にも拾ってくれた。俺は二人の仕掛けてくるであろう追及の嵐をどうやり過ごすかを必死に考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1916z/>

「三人目の魔法使い」

2011年12月25日14時28分発行